

異文化を読み解くための批判的思考

平 柳 行 雄

Critical Thinking for Cross-Cultural Studies

Yukio Hirayanagi

抄 録

本務校での「海外研修」という授業は、自国の中にあるサブカルチャーという異文化と他国の中にある異文化に接触することによる自文化の相対化を教示する。異なる姓・年齢・職業の日本人のグループが接触することによるサブカルチャーショック、さらに、日本人が日本または他国で非日本人と接触することによるカルチャーショックの事例から自文化変容の必要性を考察する。次の3つの異文化接触を分析する。①日本人同士のサブカルチャーショック、②日本人が非日本人と接触することによるカルチャーショック、③日本人が関与していない2つの文化接触によるカルチャーショックである。この分析では、自文化中心主義と文化相対主義の問題点を考察する。さらに、この考察には、批判的思考を必要とする。批判的思考とは、演繹、帰納、アブダクション、仮説演繹法、そして論証を指す。

キーワード：自文化の相対化、自文化中心主義、文化相対主義、批判的思考

(2015年9月24日受理)

Abstract

The class titled “Overseas Study” at my college teaches “relativisticization” of one’s own subculture, by comparing with a different subculture existing within one’s own country and of one’s own culture, by comparing with a different culture that exists outside of one’s country. The stories of Japanese who are of different genders, ages, or occupational groups mingling with one another as well as of Japanese mingling with other non-Japanese whether in foreign countries or in Japan help the students to realize that different subcultures exist in Japan just as different cultures exist in the world. Three different categories of situations were analyzed: ① situations where incidents of subculture shock took place between two Japanese groups, ② situations where incidents of culture shock took place between a Japanese national and a non-Japanese and ③ situations where incidents of culture shock took place between a group of non-Japanese and another group of non-Japanese. Ethnocentrism and cultural relativism were analyzed through critical thinking skills, which included deductive and inductive reasonings,

abduction, the hypothetico-deductive method and argumentation.

Key words: Relativisticization of One's Own Subculture and Culture, Ethnocentrism, Cultural Relativism, Critical Thinking

(Received September 24, 2015)

1. はじめに

筆者の本務校では、開学2年目の2002年度より、2011年度まで海外研修旅行を毎年実施してきた。オーストラリア・スウェーデン・アメリカ・シンガポール・イタリア等様々な国に研修に出かけたが、2012年度より、異文化の学びを深める必要性から、海外研修旅行の参加条件として、「海外研修」という科目の単位修得が義務づけられるようになり、筆者は、2012年度から「海外研修」という科目を担当するようになった。この科目は、海外研修旅行に参加したい学生には必須の科目であるが、この科目の履修者は必ずしも海外研修旅行に参加しなくてもよいことになっている。この科目は、1年次生から履修できる共通科目である。そして、この履修者は年々増加している。2012年度は21名、2013年度は22名、2014年度は47名、2015年度は64名であった。研修旅行に参加したいという意味を表明した学生は、2015年度の第1回授業で実施したアンケートによれば32名であった。

この科目は、①筆者の8回の講義、②海外経験のあるゲストスピーカー5名の1回ずつの講義、③履修者の自文化観察発表と④学習したテーマについての「レポート」作成という授業内容である。河内(1998)は、自文化観察とは、フィールドワークの小規模の観察調査によるサブカルチャー分析の体験学習であり、異文化に対する認知を向上させるためには、自文化を支配する法則・慣行が普遍的でないことを自覚することが重要であると述べている。この科目は、次の2点を目標にした。

- (1) 日本人同士のサブカルチャーショック事例、日本人の非日本人とのカルチャーショック事例を教材にして、自文化を相対化し自文化変容すること
- (2) 日本人の関与していないカルチャーショックを教材にした自文化中心主義と文化相対主義の問題点の指摘

そのために批判的思考を導入した。この「批判的思考」力を「クリティカルシンキング」力と「批判」力に二分する。前者は、演繹・帰納・アブダクション(仮説推論)・仮説演繹法を用いた推論のスキルであり、後者は、ある立場から他の立場を論証するスキルである(平柳、2013)。

黒木(2014)は、文化とは、「知識、信念、芸術、道徳、法、慣習、その他およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習慣を含む複合的全体」というタイラーの定義を修正したものがよく用いられると述べている。原沢(2015)は、文化を歌舞伎・生け花のような「見える文化」と価値観や信条のような「見えない文化」に二分している。文化を「見えない文化」と解釈すれば、異文化の人とは、遠い存在ではなく、自分の隣にいる人も異文化

的な面を持っている人であり、「見えない文化」という点で、海外に行かなくても日本で異文化接触による自文化の相対化を可能にさせる。さらに、原沢は「見えない文化」をトータルカルチャーとサブカルチャーに分類している。前者は、日本文化・アメリカ文化・中国文化等であり、後者は、生年、出身地、育った家族、職業、現在の家族、趣味、宗教、民族、海外経験、性別など個人を支えるカルチャーと定義している。本稿では、トータルカルチャーをカルチャーと表記する。

池田（2011）は、カルチャーショックを「一時的な衝撃というより、異文化環境への適応過程で経験する一連の現象」と定義している。異文化と接触し、自文化が通用しなくなることを自覚し、自文化の普遍性に疑問を抱くには、カルチャーショックが必要であろう。黒木は、一つの文化あるいは一つの言語内の非言語コミュニケーションが単一であるとは限らないので、地域・経済階層・ジェンダー・教育・職業等のサブカルチャーの違いから、サブカルチャーショックを受けることがあると述べ、このサブカルチャーショックを、「地元で当然だと思っていた常識が通じなくなり、周りに同化しようとする事」であると分析している。さらに、黒木は、非言語行動には、アイコンタクト・接触・姿勢・ジェスチャー・顔の表情・沈黙などがあるとしている。池田（2011）によれば、同化とは、「自文化を離れ、新しいホストカルチャーを理解し、現地の人たちと同じようにふるまえること」を指す。次に、講義計画を記載する。

表 1

講義計画	テーマ	学習項目・課題
第1回	オリエンテーション、異文化・自文化とは？	異文化接触によって自文化を相対化する。そのためにサブカルチャーを学ぶ。根拠・論拠と演繹を学ぶ。
第2回	自文化・異文化分析 (1)	「郷に入れば郷に従え」、自文化中心主義と文化相対主義を考える。帰納と仮説演繹法を学ぶ。
第3回	自文化・異文化分析 (2)	自文化変容とアイデンティティを考え、アサーティブコミュニケーションを学ぶ。アブダクションを学ぶ。
第4回	自文化・異文化分析 (3)	高コンテクスト文化と低コンテクスト文化を通して文化本質主義を考える。演繹と帰納を復習する。
第5回	自文化・異文化分析 (4)	多値的思考を通して、ステレオタイプと偏見を考える。根拠・論拠を復習する。
第6回	自文化・異文化分析 (5)	アファーマティブ・アクションは逆差別かどうかを考える。論証を学ぶ。
第7回	自文化・異文化分析 (6)	「強い文化」と「弱い文化」をマジョリティとマイノリティを通して考える。論拠と根拠、論証を復習する。
第8回	自文化・異文化分析 (7)	イスラム教徒の女性のブルカ着用と割礼という慣行をマジョリティとマイノリティを通して考える。
第9回	異文化体験を聞く (1)	異文化体験をした教職員から学ぶ。
第10回	異文化体験を聞く (2)	異文化体験をした教職員から学ぶ。
第11回	異文化体験を聞く (3)	異文化体験をした教職員から学ぶ。
第12回	異文化体験を聞く (4)	異文化体験をした教職員から学ぶ。
第13回	異文化体験を聞く (5)	異文化体験をした教職員から学ぶ。
第14回	自文化観察調査発表	各グループで、自文化観察調査を発表する。
第15回	まとめ	学習したことをメタ認知的にとらえる。

本授業では、サブカルチャーという異文化接触、日本人と非日本人・非日本人同士という異文化接触の事例研究を通して、自文化変容の重要性と自文化中心主義・文化相対主義の問題点を検証した。本稿では、その授業の取り組みについて報告する。その報告には、批判的思考力の理解が必要であることと、事例研究で提示された課題に対する何名かの受講者の意見についての筆者の分析を記載する。

2. 自文化変容

黒木によれば、文化変容とは、「個人や集団が、直接的接触や相互作用を通じて他の個人や集団の文化的特性を習得する過程」を指す。文化の相対化は、異文化に触れて、それまでの常識が通用しなくなることである。黒木は、文化を相対化することによって、「なんでもあり」を認める態度をとるか、多文化意識を認めるかに分けられると述べ、さらに、多文化意識とは、「文化の複数性を認め、違いを知るだけでなく、違いから学ぶ（従って変容すること）」と説明している。文化を相対化して、自文化変容することが必要とされている。黒木は、自文化中心主義とは、「異文化を拒否し、自文化を維持する単一文化志向であり、文化の価値を判断するときに自文化のものさしを使うこと」と定義している。文化相対化、自文化中心主義、同化、多文化意識を図示すると以下ようになる（黒木）。この図の文化相対化は、「何でもあり」の文化相対主義を指していると考えられる。黒木は、文化相対主義を、「自分たちの価値基準で異文化の慣行を判断しないこと」と定義し、さらに、自文化変容プロセスでは、「違いを尊重することは、無批判に相手に同化するのではなく、何でもありという相対主義でもない。違いに対してオープンになり、自分の文化的アイデンティティをもつことである」と述べている。

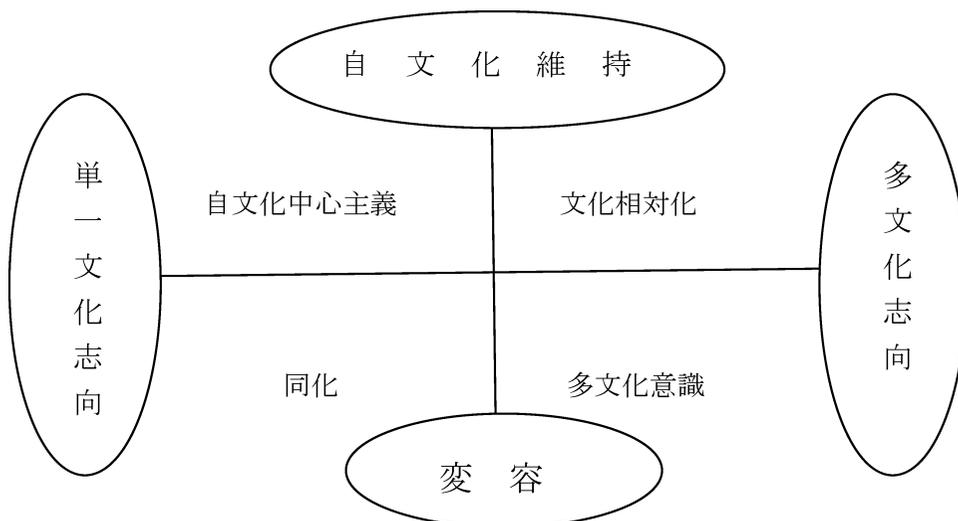


図1

富田・バーメンター (2011) は、クリティカルな異文化間理解能力を、次のように定義している。

ある異文化に接触した時に、自分自身がその文化に対してもっている視点や考え方に
関する内省を繰り返し、その文化に関する情報を集めることや、さまざまな角度から
の新たな批判的検討を加えることを通して、その文化についての、より深く、相対的
で、複合的な理解にたどりつくことができる能力

さらに、バイラム の5つの異文化間能力を構成する要素を次のように述べている。

- ① 態度：異文化に対する否定的観念と、自文化に対する肯定的観念に対する判断を留保
するために必要な、趣味と柔軟性と積極性をもっていること
- ② 知識：自分自身が所属する社会的集団と、対話する相手が所属する社会的集団が生産
した物や（その集団の）営みに関する知識と、社会的および個人的交流に関す
る一般的な過程についての知識をもっていること
- ③ 解釈し続ける技能：異文化における公刊物や出来事を解釈し、説明し、自文化におけ
る公刊物や出来事と関連づける技能をもっていること
- ④ 発見し交流する技能：ある文化またはその文化における営みに関する新しい知識を得
る能力や、実際のコミュニケーションや交流の場面における制約の下で、知識
と態度と技能を活用する能力
- ⑤ 批判的文化認識：自文化と異文化または異国における営みや（その文化が）生産した
物に関して、明確な基準になりうる視点に基づいて、批判的に評価する能力

自文化を相対化するには、日本国内で異文化を発見し、サブカルチャーショックを経験す
る必要がある。授業では、出来るだけ、サブカルチャーショックに焦点をあてて、自文化
の相対化と自文化変容が自分の問題であることに気づかせようとした。カルチャーショッ
クの事例を、次の3種類に分類し、批判的思考を通して分析した。

- (1) 日本人同士のサブカルチャーショックの事例
異文化間理解能力の①と⑤に関連
- (2) 日本人の非日本人とのカルチャーショックの事例
異文化間理解能力の①と③と⑤に関連
- (3) 日本人が関与していないカルチャーを分析するための事例
異文化間理解能力の⑤に関連

3. 批判的思考

この項目では、順命題・逆命題・裏命題・対偶命題、演繹、帰納、アブダクション、仮
説演繹法、そして論証という批判的思考を構成している概念項目を述べる。

3. 1. 根拠・論拠の妥当性

「批判的思考は、他人の誤りや欠点を指摘するための思考」とよく解釈される。何故このような誤解がおこるのか。この内容を検証する。ゼックミスタ・ジョンソン(2007)によれば、演繹とは、いくつかの前提をもとに、論理的に妥当な形式だけにとって結論を導き出す手続きであり、帰納とは、個々の現象から一般的な結論を導き出す手続きのことである。「批判的思考」という表現は、「批判的」と「思考」を合成した表現と考えられている。例えば、「ファミレス」は「ファミ=ファミリー」+「レス=レストラン」で、「ファミリーレストラン」という意味になるという合成性の原理に基づく。吉村(2004)は、合成性の原理とは、「まとまり全体の意味が、個別の要素の足し算した意味」と述べている。では、この合成性の原理は妥当な概念であろうか。妥当性を否定するには、1つの反証が存在することを示すだけで十分である。その反証は、「夜空」である。「夜空」には、「夜」+「空」以上の意味が含まれているし、読み方も違う。従って、合成性の原理は必ずしも正しくないと言える(吉村、2004)。デジタル大辞泉は、批判を①「人の言動・仕事などの誤りや欠点を指摘し、正すべきであるとして論じること」以外に、②「物事に検討を加えて、判定・評価すること」という意味もあると記している。批判と言えば、①の意味しかないとは断じたことが、「批判的思考は、他人の誤りや欠点を指摘するための思考」という誤解の原因であると言えるであろう。この誤解を、根拠・論拠・主張の三角ロジックを使って説明すると、下記ようになる。

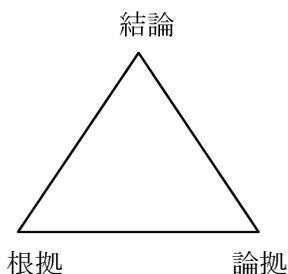


図2

福澤(2006)によれば、根拠とは、主張を導くもとなる証拠であり、論拠とは、根拠からどうして主張が導かれるかの理由に対応するものである。これに基づいて、この事例の論拠と根拠を指摘すると次のようになる。

- ・合成性の原理は常に妥当である(論拠)。
- ・「批判的思考」は、「批判的」+「思考」に二分され、「批判」は他人の誤りや欠点を指摘し、正すことという意味しかない(根拠)。
- ・したがって、「批判的思考」は、「他人の誤りや欠点を指摘するための思考」と解釈される(結論)。

合成性の原理は必ずしも正しいとは限らないが、この事例では、論拠である合成性の原理を適用できる。何故なら、楠見(2011)らは「批判的思考」とは、論理的・合理的思考、

基準に従う思考であり、自分の推論プロセスを吟味する内省的・熟考的思考と定義し、「批判」をデジタル大辞泉の②と解釈しているからである。

3. 2. 演繹と帰納とアブダクションと仮説演繹法

米盛(2009)は、演繹・帰納・アブダクションを次の例を使って説明している。上記した三角ロジックで説明した根拠・論拠・結論は、3. 2.の項目では、それぞれ事例・規則・結果に相当する。アブダクションを、演繹と帰納と関連づけて説明する。

演繹

- (1) この袋の豆はすべて白い(規則)。
- (2) これらの豆はこの袋の豆である(事例)。
- (3) ゆえに、これらの豆は白い(結果)。

帰納

- (1) これらの豆はこの袋の豆である(事例)。
- (2) これらの豆は白い(結果)。
- (3) ゆえに、この袋の豆はすべて白い(規則)。

アブダクション

- (1) この袋の豆はすべて白い(規則)。
- (2) これらの豆は白い(結果)。
- (3) ゆえに、これらの豆はこの袋の豆である(事例)。

「規則」と「事例」が正しいと判断されれば、演繹では「結果」は正しいと推論される(野矢、2007)。しかしながら、アブダクションにおいては、「規則」と「結果」が正しくても、「事例」は必ずしも正しいとは言えない。何故なら、これらの豆は、この袋以外の豆である可能性があるからである。内田(2012)は、推論を「いくつかの命題を根拠として他の命題を導出すること」、平尾(2005)は、命題を「真偽を決定できる文」、さらに、野矢は、導出を「ある主張から他の主張を導く過程」と定義している。

市川(2008)は、アブダクションを、一般命題と事実命題が与えられて、それを矛盾なくつなぐ命題を仮説として生成するタイプの推論と定義している。一般命題・事実命題・生成される命題は、米盛の「規則」・「結果」・「事例」にそれぞれ相当する。市川は、次のような例を示している。

すべてのメキシコ人は陽気である(一般命題)

ホセは陽気である(事実命題)

だから、ホセはメキシコ人なのではないか(生成される命題)

一般命題と事実命題が正しくても、生成された命題は、必ずしも正しくない。何故なら、ホセがメキシコ人以外、例えば、アメリカ人かもしれないからである。さらに市川は、このアブダクションは「後件肯定の誤謬」と同じと指摘している。肯定式とは「Pである。したがってQである」は、「PならばQである」が前提のとき、論理的に妥当な推論であ

り、否定式とは「Qでない。したがってPでない」という論理的に妥当な推論をさすと説明し、「Qである。したがって、Pである」は論理的には誤りで、これを後件肯定の錯誤という説明している。「Qである。したがって、Pである」は逆命題とも呼ばれる(野内、2003)。

必要十分条件を使って説明すると、次のようになる。例えば、アリバイのない人は犯人であるための必要条件であっても、十分条件ではない。しかしながら、犯人であれば、アリバイがないための十分条件となる。図3のベン図で言えば、「BはAであるための必要条件であり、AはBであるための十分条件である」となる。

A : 犯人の集合
B : アリバイのない
人の集合

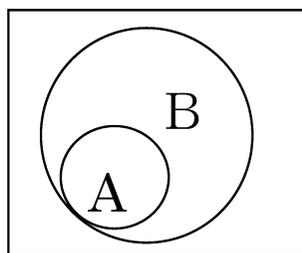


図3

順命題・逆命題・裏命題・対偶命題を使って説明する。順命題が「AであればBである」であるとき、逆命題は「BであればAである」であり、裏命題は「AでなければBでない」であり、対偶命題は「BでなければAでない」となる。図3のベン図から、「AであればBである」という順命題が真であれば、逆命題・裏命題とも偽であり、対偶命題は真であることが理解できる。

藤澤(2011)は、仮説演繹法を次のように定義している。即ち、いくつかの経験的な事実から帰納的に仮説を導きだし、その仮説から演繹的に具体的な事象の存在を予測した上で、外在的世界で観察・実験・調査を行って、予測した事象が存在するかどうかを検証する。予測通りであればその仮説は妥当性が高いと認め、予測が成り立たなければ仮説を破棄する。戸田山(2003)は、アブダクションと仮説演繹法の違いを次のように説明している。

- ・アブダクションは、すでに与えられたデータを手がかりにして、それを説明する新しい仮説を主張するもので、仮説形成の論理だと言ってよい。とはいうものの、ふつうは、これだけで仮説が正しいと主張されることはない。アブダクションの次に、仮説の確かめがなされることが多い。それが仮説演繹法である。
- ・アブダクションを「Aということがすでにわかっている。Hという仮定をおけば、何故Aなのかをうまく説明できる。他に、何故AなのかをHと同程度に説明できる説明はない。したがって、たぶんHは正しい」と定義し、仮説演繹法を「Hという仮説が正しいならば、Bが成り立つはずだ。実際Bである。したがって、たぶんHは正しい」と定義している。

4. 事例研究

異文化接触によって引き起こされるサブカルチャーショックとカルチャーショックの事例を取り上げる。また、サブカルチャーショックとカルチャーショックから気づきを生成するために批判的思考を用いる。

4. 1. 日本人同士のサブカルチャーショックの事例

次に記載されている事例では、自文化の中におけるサブカルチャーショックの存在の気づきを検証する。

事例1 第1回授業 (サブカルチャーの存在と仮説演繹法を学ぶ)

エスカレーターでの立ち位置も社会的ルールであるが、年配の人で守らない人がいると、そこで歩く流れが止まり、迷惑となることがある。一般的に関東では左に立つが、関西では右に立つ。 『多文化共生のための異文化コミュニケーション』より

エスカレーターで、急ぐ人のために左側をあけるのは、筆者の住む神戸市内のエスカレーターを利用する際のルールとなっている。さらに、筆者は大阪でも神戸のルールは当てはまることを確認した。この推論は帰納である。「神戸・大阪のエスカレーターのルール（急ぐ人のために左側をあける）は普遍である」と考え、東京でも「エスカレーターは、急ぐ人のために左側をあける」と推論し、そのように行動しようとするれば、現実的には問題となる。何故なら、東京では、エスカレーターでは、急ぐ人のために開けるのは右側だからである。「エスカレーターの立ち位置に関して、一般的には、関西では右に立ち関東では左にたつ」という仮説が正しければ、「神戸・大阪では右に立ち、東京では左にたつ」が成り立つはずである。実際にそうである。これは、仮説演繹法である。

4. 2. 日本人の非日本人とのカルチャーショックの事例

次に記載される事例では、仮説演繹法、アイデンティティ、ステレオタイプを検証する。

事例2 第2回授業 (仮説演繹法を学ぶ)

アメリカのイエール大学（コネチカット州）での大学院セミナーを担当していたある日、猛烈な吹雪だったため、大学に行くのにレンタカーを呼んだ。「“Orange”の車が10分くらいで到着する」という連絡をもらったので、ホテルで待っていた。10分経っても、到着しない。20分過ぎたとき、あることに気がついた。「茶色」の車が停まっいて、その運転手が筆者の方を窺っていた。 『日本語と外国語』（鈴木孝夫）より

英語の“orange”は、日本語では「オレンジ、オレンジ色」であると英和辞書に書かれている。“Orange”を「オレンジ色」と解釈して問題はなかった。帰納推論である。だから、鈴

木は米国のイエール大学の授業を担当していたある吹雪の日に、レンタカーを呼んだとき、「Orange」色の車が配車される」と言われていれば、「オレンジ色」の車が配車されるのを待てばよいと考えた。しかしながら、「オレンジ色」の車が配車されず、「茶色」の車の運転手が鈴木を窺っていたことから、英語の“orange”は日本語の「茶色」の意味も含むであろうという仮説をたて、そうであれば、「その窺っていた運転手が連絡をとったタクシー会社から派遣された運転手である」が成り立つ。実際に、そうであった。これは、仮説演繹法である。

事例3 第3回授業 (アイデンティティを学ぶ)

アメリカ滞在中に、スーパーマーケットの駐車場で、「選挙のための登録はお済ですか」と問われた。何故、外国人とすぐわかるのに、呼びかけてきたのかと不思議に思ったが、その頃は、外国人かどうか相手は判断できるであろうと安易な思い込みがあった。

『異文化論への招待』(黒木雅子)より

何故、黒木は、米国滞在中に「選挙のために登録はお済ですか」と問われたのであろうという疑問をもった。これをアブダクションの事実命題・一般命題・生成される命題で説明する。

事実命題：黒木が、米国滞在中に、「選挙のための登録はお済ですか」と問われた。

一般命題：米国では、肌の色から明らかにアジア系とわかっているが、市民権をもたない外国人と一般化しない。何故なら、アジア系であっても市民権(投票権も含む)をもっている人(例えば日系アメリカ人)が存在するからである。

生成される命題：黒木は、アジア系アメリカ人と解釈された。

「日本人か外国人か」という黒木のアイデンティティの基準は、「選挙のための登録はお済ですか」と問うアメリカ人の「どのエスニシティに属するか」というアイデンティティの基準とは異なる。

事例4 第5回授業 (ステレオタイプを学ぶ)

外国の映画を観ればわかるように、ディベートの盛んな国々では、だれもが身振り手振りを交えて盛んに自己主張をし、相手の言うことにも遠慮なく反論する。日本人からすれば、あんなに感情的になって激しく言い合わなくてもいいのに、いつもあんな風をやったら疲れちゃうだろうと感じる。でも、彼らにとっては、それがごくふつうの日常なのだ。常に議論を戦わせて生きている。私たち日本人とは正反対だ。自己主張を控え、相手の言うことを極力否定しないように気をつかう。----(下線部は本稿の筆者による)

『ディベートが苦手、だから日本人はすごい』より

この事例4の著者は、「日本人はディベートが苦手である」と主張している。安藤・田所(2003)によれば、ディベートとは、自分の意見に関係なく、肯定側か否定側に分かれ、討

論し勝敗を決めるものである。しかしながら、日本人のなかにもディベートに長けている人々がいることは、ディベートに関する著作を調べればわかることである。例えば、松本道弘の『ディベートの原理・原則』、安藤香織・田所真生子の『実践！アカデミック・ディベート』、松本茂の『頭を鍛えるディベート入門』、茂木秀昭の『ザ・ディベート』等を挙げることが出来る。即ち、日本人を一括りにはできない。黒木は、ステレオタイプを、あるカテゴリーの人々を十把ひとからげにして過度に一般化したものと定義している。「日本人はディベートが苦手である」は、日本人をステレオタイプ化したものと言える。

下線部の「私たち日本人」という表現は、私たち日本人と私たち以外の非日本人に二分し、日本人であれば誰もが同じ価値観・慣習に則って生活していることを示唆している。しかしながら、事例1で考察したように、日本にもサブカルチャーが存在することから、日本人が同じ価値観に従って行動しているとは必ずしも言えない。例えば、ディベートに価値を見出す人もいれば、そうでない人もいる。従って、「私たち日本人」という表現はステレオタイプ化を助長するので、避けるべきである。

4. 3. 日本人が関与していないカルチャーショックを分析するための事例

この事例では、「強い文化」と「弱い文化」、イスラム教徒の女性の慣行を検証する。

事例5 第7回授業 「強い文化」と「弱い文化」を学ぶ

An example is the way traditional clothing changed. In traditional Balinese society most women wore nothing from the waist upward, the lower half of the body being covered by a full-length sarong. When Europeans began to arrive they were shocked by the sight of partially-clothed females. Soon after, social pressures forced the women of the island to begin wearing blouses.

At the same time, Balinese men had rarely seen a woman's ankles. When some Balinese women adopted the shorter skirts of Europeans, many islanders were just as offended as the Europeans had been to see women without blouses.

This is a prime example of the conflicts that tourism frequently produces. When there is a clash of value systems and moral beliefs, social change often occurs; this is natural. But when one country is more powerful than the other, it is usually the weaker one that adapts its customs.

A World in Common より

これは、強い文化（マジョリティー）と弱い文化（マイノリティー）の接触によるカルチャーショックの例である。黒木は、マイノリティーとは、「集団を構成する人数が多いか少ないかという数的概念ではなく、政治的概念である」と定義している。バリ島で、上半身裸で生活している女性を目撃したヨーロッパからの観光客は、女性たちにブラウス着用を強要した。また、ヨーロッパからの観光客が上半身裸の女性に出会って驚愕したよう

に、バリ島の女性たちがヨーロッパからの観光客の要望に応じて短いスカートを着用するようになったとき、島人たちの心は傷ついたと記されている。結果的には、ヨーロッパからの観光客は、自分たちの価値観をバリ島の女性たちに押しつけたことになる。これは自文化中心主義にあたる。マイノリティー（経済的弱者）であるバリ島の女性は、マジョリティーであるヨーロッパからの観光客（経済的強者）に自分たちの価値観を主張できなかった。

事例6 第8回授業 (イスラム教徒の女性の慣行から学ぶ、その1)

女性が男性より低い地位しか与えられず、人間として生きていくうえで最低限度の尊厳さえ守られていないところがある。その場所で行われている慣習の例としては、イランなどのイスラム諸国での名誉殺人や「割礼」、インドの「花嫁焼殺」などがあげられる。名誉殺人とは、駆け落ちや誘拐、レイプの被害など一族の名誉を傷つけたと思われるような行動や被害にあった女性を、「名誉を守るために」一族の男性が殺すことを意味する。----「割礼」とは、女性外性器の一部や全部を切除することを言う。割礼を受けている当の女性たちの中には、割礼の慣行を問題視し、慣行の廃止を推進しようとする運動そのものを「異文化を認めない自文化中心主義的な傲慢な態度」として批判するものも存在する。異文化コミュニケーションにおいて最も大切なことはすべての文化に優劣はないとする文化相対主義だと言われているが、そうなると、このような「割礼制度」が文化であることと主張されれば、それを認めざるをえないことになる。----「文化相対主義」が複雑な現実社会の問題にあって、「絵に描いた餅」、つまり「実現できない理念」でしかないとしばしば批判される。

『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』より

バリ島の女性はヨーロッパからの観光客の自文化の強制（自文化中心主義）に対して反論をせずに受け入れたが、この事例6では、割礼という慣行を「強要」されているイスラム教徒の女性への人権擁護の主張に対して、イスラム教徒の女性は「異文化を強要するな」と反論している。この主張は文化相対主義であり、「絵に描いた餅」とも言われる。「何でもあり」を実践しているように解釈されるからである。これが文化相対主義の限界とも言える。2つの立場が存在する場合は、相手側に対して「批判」するスキルが必要となる。

野矢（2007）によれば、相手の主張の論証部に対して反論することを「批判」と呼び、「論証」は、根拠と導出を含むとしている。従って、論証の正しさは、根拠の適切さと根拠から主張を導く導出の適切さという2つを意味することになる。「批判」とは、例えば、「死刑は抑止力があるので、存続させるべきである」という主張に対して、「いかに極悪な人間でも人権は保障されるべきである」は「批判」ではない。この主張に対する「批判」としては、「死刑になりたいために、何人もの人間を殺傷する被疑者がいる。これは、その被疑者にとって、死刑が抑止力になっていないことを示す証拠になる（平柳、2010）。例えば、2008年6月8日の秋葉原無差別殺傷事件がその例である」と、相手の主張の論拠と

なっている抑止力の妥当性に疑義を呈することである。

事例7 第8回授業 (イスラム教徒の女性の慣行から学ぶ、その2)

2010年7月13日、イスラム教徒の女性が顔や全身を覆うベール「ブルカ」を公共の場で着用することを全面的に禁止する法案をフランス下院が可決した。フランスの政教分離の伝統にのっとった判断だとする賛成派とブルカ着用は女性の自発的な選択であり、禁止は信教の自由の侵害と訴える反対派の論争は今も続いている。---- このブルカで顔を覆い隠す行為は治安維持や人々の共生を難しくする恐れがあるというフランス政府の見解である。

---- 「ブルカ禁止を支持する意外な判決」ニューズウィーク 2014年7月号より

外出時のブルカ着用という慣行を順守しているイスラム教徒の女性は、異文化の価値観(外出時ブルカ着用を拒否できるような女性の平等が保障されるべきである)の強要はやめてほしいと反論している。つまり、イスラム教徒の女性は文化相対主義を主張していることになる。この事例では、イスラム教徒の女性における反論に対する再反論のないところが問題である。相手の論証の矛盾を指摘する論証力が必要とされる。何故、女性の権利を守るという普遍性のある主張をイスラム教徒の女性は受け入れないのかを考える必要がある。ブルカ着用を慣行としているイスラム教徒の女性にとって、この慣行はメリットがあるのかもしれない。この慣行を別の視点で見る必要がある。問題解決のためには、物事を一つの視点から判断するのではなく、複数の視点から判断する多値的考え方が要求される。藤澤(2011)によれば、多値的考え方とは、物事を、善人か悪人か、敵か味方かというような二種類に分けるのではなく、「非常によい」「よい」「普通」「悪い」そして「非常に悪い」のように程度を何段階にもわけて考えたり、複数の視点から判断することである。

5. 事例研究から受講生は何を学んだか

第1回を除き、毎週ワークシートを配布した。そこに授業で取り上げた解決すべき課題を提示し、それに対する意見を書かせた。次に、いくつかの課題に関する受講生の意見を記載し、それを筆者が分析する。

第7回授業

バリ島の記事を読んで、何が問題であったかを考えよう。ヨーロッパ人観光客の自文化中心主義か、バリ島住民の文化相対主義か。

- ・強い文化と弱い文化の衝突を例えるとすると、中小企業などが大企業に吸収されることで、中小企業のハウスルールが変わることである。中小企業は吸収されたことにより、経営は安定するだろうが、今までとは経営方針や営業の仕方、企業理念が変わってしま

い仕事に戸惑いを感じ仕事を行いにいと感じてしまうのではないだろうか。(一部省略)

[筆者のコメント]

強い文化と弱い文化の衝突を興味深い例えて説明し、相手側の立場も考慮している点が評価できる。

第8回授業

イスラム教徒の女性の人権を擁護するにはどうすればよいか。文化相対主義に言及して書こう。

- ・イスラム教徒の女性にとって割礼や名誉殺人は文化であり、信仰に基づいた慣行である。確かにイスラム教徒でない人からすれば、非人道的な行為として捉えることもできる。しかし、彼女たちがこの教えに基づき慣行を受け入れている以上、他の文化から見て受け入れがたいことだからといって、これを廃止させることはできないと考える。彼女たちにとって、割礼や名誉殺人は人権問題の範疇ではないのかもしれない。(一部省略)

フランス議会のブルカ着用禁止法制化に賛成か、反対か。その根拠も書こう。

- ・「フランス建国理念に反する」または「女性抑圧の象徴」と捉えることが自文化中心主義の表れであるといえる。ブルカは女性抑圧の象徴である以前にイスラム教徒の女性であるという象徴である。宗教上の象徴や文化または自由についてフランス議会が法律を定め、法で裁くことが許されるのか。(一部省略)
- ・賛成である。しかし、ブルカの文化は長年継がれてきたため、ブルカ着用を文化の一つとして考えている人たちも多いと考える。ブルカの文化を知らない私たちだからこそ、賛成できるが、実際問題はブルカ着用禁止の反対も多いのではないかと考える。女性の自由が少しでも認められるなら、賛成である。
- ・反対である。「隷属や服従の印である」という意見も理解できるが、だからといって、無理に変えるのはよくないと考える。それでは、押しつけになってしまう。ブルカを着用している人たちが着たいというのであれば黙っておくべきである。
- ・反対である。ブルカは教えを信じている象徴であり、教えに忠実に従っている。それを否定するのは、イスラム教のお祈りや仏教のお経をあげることを禁止することと同じと考える。他の教えを信じている人には分からないかもしれないが、その当事者にとっては、大切な文化であるため、文化相対主義の考え方からブルカ着用を認めるべきである。

[筆者のコメント]

書き方に難のある学生もいるが、「確かに----しかし」等の表現を使って、相手側の考えを考慮しながら自分の意見を述べているので、無批判の意見でないことを示している点が評価できる。

上述した「強い文化」と「弱い文化」、女性のイスラム教徒の慣行に関する意見は、非日本

人同士のカルチャーショック事例であるため、自文化変容には直接関連しないものであった。引用した比較的優秀な意見を書いた受講者は6名と少数であることは今後の取り組みの課題であるが、相手側の立場を考慮しながら自分の意見を書くという批判的態度は評価できるものである。

6. ゲストスピーカーと自文化観察発表

ゲストスピーカーと自文化観察調査の説明をする。ゲストスピーカーとは、筆者の本務校の教員4名と職員1名である。5名とも、海外留学または海外での職務経験を有する人々である。この5名の講義の目的は、受講者に海外または海外での学びに対する内発的動機づけを与えることである。

受講者は、次のようなコメントを述べている。「海外医療のお話しなんて、めったに聞くことができないため、とても興味深かった」とか「ずっと海外には行きたくないと思っていたが、ゲストスピーカーの話しを聞いて少しは行きたくなった」である。

自文化観察調査発表とは、ある自文化と考えられることについての仮説をたて、それが妥当かどうか、観察調査をグループで行うものであった。例えば、あるグループは、「女子学生は男子学生に比べてよくお喋りをするという印象が強いので、講義でも積極的に発言する」という仮説をたてて、ある特定の授業を7回観察した。この授業の担当教員には、筆者から観察調査の許可を得た。観察の結果は、「仮説とは異なり、日によって異なる」というものであった。クラス環境の違い、出席した男子学生・女子学生の性格の違いという他の要因も考慮しなければならないが、観察調査により仮説を考察・検証するという機会が提供されたと言える。この観察評価に関しては、発表内容の論理性・発表内容の独自性・発表のわかりやすさ（PowerPointを使用したかどうか等）で判断した。

7. まとめ

本稿では、異文化接触の事例研究を通して、自文化変容の重要性と自文化中心主義・文化相対主義の問題点を検証し、その検証には批判的思考が必要であることを報告した。

「海外研修」という授業15回の授業のうち、8回の講義を筆者が担当し、5回をゲストスピーカーに1回ずつ講義をしてもらい、受講者には自文化観察調査発表と筆者の講義内容に関する「レポート」作成を課した。8回の講義で、自文化を相対化し自文化変容するための日本人同士のサブカルチャーショック事例、日本人の非日本人とのカルチャーショック事例を取り上げた。また、日本人が関与していないマジョリティとマイノリティのカルチャー接触による文化摩擦の事例を取り上げて、自文化中心主義の問題点と文化相対主義の限界を検証した。文化相対主義は「何でもあり」と解釈され、問題の解決にはならないことも指摘した。こうした事例の検証には批判的思考が必要である。批判的思考とは、演繹・帰納・アブダクション・仮説演繹法、そして論証を指す。

参考文献

- 池田理知子編著 (2010) 『よくわかる異文化コミュニケーション』京都 ミネルヴァ書房 99-100
- 内田詔夫 (2012) 『論理の基礎と活用』 東京 北樹出版 18
- 榎本博明 (2014) 『ディベートが苦手、だから日本人はすごい』 東京 朝日新聞出版 3-5
- 河内智子 (2011) 「観察調査を通じて自文化と出会う」『異言語と出会う、異文化と出会う』 成蹊大学文学部学会編 東京 風間書房 96-104
- 楠見孝・子安増生・道田泰司 (2011) 『批判的思考力を育む一学士力と社会人基礎力の基礎形成』 東京 有斐閣 2-24
- 久米昭元・長谷川典子 (2007) 『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』東京 有斐閣選書 183-184
- 黒木雅子 (2014) 『異文化論への招待』 大阪 朱鷺書房 50, 53, 64, 147-149, 175
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』 東京 岩波書店 8-9
- ゼックミスタ, E.B. & ジョンソン, J.E. 宮元博章他訳 (1996) 『クリティカルシンキング入門編』 京都 北大路書房 4
- 戸田山和久 (2002) 『論文の教室ーレポートから卒論まで』 東京 日本放送出版協会 164, 169
- 富田祐一、リン・パーメンター (2006) 「クリティカルに異文化を読み解く」『クリティカル・シンキングと教育』 京都 世界思想社 177-178
- 野内良三 (2003) 『実践 ロジカル・シンキング入門』 東京 大修館書店 55
- 野矢茂樹 (2006) 『論理トレーニング』 東京 産業図書 3, 57-58, 152
- 原沢伊都夫 (2014) 『多文化共生のための異文化コミュニケーション』 東京 明石書店 16, 29-30, 39
- 平尾始 (2005) 『図解雑学 論理学』 東京 ナツメ社 32
- 平柳行雄 (2010) 『日本語論証文の書く力を向上させるためのクリティカル・シンキング』 神奈川青山社 62
- 平柳行雄 (2013) 「自文化・異文化をクリティカルに分析する」『大阪人間科学大学紀要』 第12号 65
- 藤澤伸介 (2011) 『言語力ー認知と意味の心理学ー』 東京 新曜社 159-160, 175-176
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』 東京 研究社 80
- 米盛裕二 (2007) 『アダクションー仮説と発見の論理』 東京 勁草書房 81-82
- Asakawa, K. et al. (2002) *A World in Common* 東京 三修社 42
- Byram, M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence* Clevedon: Multilingual Matters
- <http://www.newsweek.japan.jp/stories/world/2014/07/post-3325.php>